

一般社団法人日本森林学会 2022年度(令和4年度)事業報告

(事業期間：2022年3月～2023年2月)

(1) 第133回日本森林学会大会の開催

第133回日本森林学会大会(2022年3月27日～29日)。大会運営委員長：林田光祐会員，山形大学)がオンライン大会として開催された。公開シンポジウムのみ山形市の会場とオンラインとのハイブリッド形式で開催し，公開合同シンポジウム「東北の森から一山の文化と人々の暮らし」には349名の視聴参加があった。大会参加者は1,158名で，発表件数727件(口頭210件，ポスター517件)であった。高校生ポスター発表を開催し27件の発表があった。学会企画として，「4年制大学における森林科学教育の現状と今後の方向－技術者教育の視点から－」「大学での森林の学びや研究を知ろう－高校生と大学生との交流を交えて－」「帰国留学生会員およびアジアの林学会とのネットワークフォーラム」「森林学会におけるダイバーシティ～多様な立場に寄りそえる学会を目指して～」「あつまれ！がっかいの森」を開催した。「第133回日本森林学会学術講演集」を発行した。

(2) 第134回日本森林学会大会の準備

新型コロナウイルスの感染拡大への対応のためオンラインでの開催を準備した(2023年3月25日～27日。大会運営委員長：山中原和会員，鳥取大学)。公開シンポジウム「森と生きる～智頭林業の取り組みから～」を企画した。公募セッションと企画シンポジウムを会員から公募し，公募セッション3件，企画シンポジウム7件を採択，14の部門別口頭・ポスター発表とともにウェブ登録システムによって研究発表申込を受け付けた。第10回高校生ポスター発表を企画し，全国の高校からの発表申込を受け付けた。学会企画として「留学・研修を通じて見えてくる多様な価値観や考え方」「ワークライフバランス懇談会」「帰国留学生会員およびアジアの林学会とのネットワークフォーラム」「大学での森林の学びや研究を知ろう-高校生と大学生との交流-」「都道府県の林業関係の試験・研究機関について」の準備を進めた。以上を含めて大会プログラムの編成を行い，「第134回日本森林学会学術講演集」の発行に向けた編集作業を行った。

(3) 第135回日本森林学会大会の準備

大会運営委員長を佐藤孝吉会員(東京農業大学)に委嘱し，大会運営委員会を組織した。開催日程を2024年3月8～11日とすることを決定した。

(4) 第136回日本森林学会大会の準備

北方森林学会からの推薦により，第136回学術大会の開催機関を北海道大学，大会運営委員長を渋谷正人会員(北海道大学)とすることを決定した。

(5) 「日本森林学会誌」のオンラインジャーナル化と会員区分の変更

2022年11月から日本森林学会誌をオンラインジャーナル化し，それに伴い森林科学の冊子体を正会員に配布することとした。会員区分はA区分(日林誌とJFRはウェブ上で閲覧，森林科学

は冊子体を配布)とB区分(日林誌はウェブ上で閲覧, 森林科学とJFRは冊子体を配布)に変更した。なお, 森林科学は冊子体ではなくウェブ閲覧を選択することもできる。

(6) 「日本森林学会誌」の発行

日林誌のオンラインジャーナル化に伴い, 2022年4月, 6月, 8月, 10月, 12月及び2023年1月の年6回冊子体を発行し, 2022年11月から, 11月, 12月, 2023年1月に2回, 2月の5回, オンラインジャーナルとして科学技術振興機構のJ-STAGEで公開した。JSTの提供するデータリポジトリサービスJ-STAGE Dataの運用を継続し, 日林誌に掲載される論文の元となったデータについてDOIを付与して公開できるサービスを会員に提供した。

(7) 「Journal of Forest Research」の発行

Taylor & Francis社から2022年4月(Vol.27 No.2), 6月(No.3), 8月(No.4), 10月(No.5), 12月(No.6)及び2023年2月(Vol.28 No.1)の年6回発行した。特集”Recent advances in the nitrogen-fixing symbiosis between Frankia and actinorhizal plants”をVol.27 No.2に, 特集”Can treeshelter rescue reforestation under deer foraging pressure? Effects on seedling growth, protection, and decision making”をVol.27 No.3に掲載した。掲載原稿数はInvited Review 1編, Original Article 46編, Short Communication 7編, Review 3編, Preface 2編, Editorial 1編, 以上の総ページ数は481ページで, 昨年度より22ページの増加となった。Invited Reviewは2編掲載することを計画していたが, うち1編は執筆者のスケジュールや掲載予定号の調整の結果, 掲載を次年度に変更した。学会HPお知らせ欄, メールマガジン, 学会ツイッターを用いて会員に発行を知らせるとともに, 日林誌と学会ウェブサイトで発表論文の日本語書誌情報を掲載した。2021年のImpact Factorは1.672で, 前年の1.269より上昇した。

(8) 「森林科学」の発行

2022年6月号(95号), 10月号(96号), 2023年2月(97号)の年3回発行した。特集「今の私たちからの, 未来の森林科学・森林学会への期待と要望」「林木育種の最前線」「変わりゆく都市近郊林ーその機能・役割と管理を再考するー」をはじめ, シリーズ「うごく森」「森をたべる」「森をはかる」「林業遺産紀行」「現場の要請を受けての研究」など, 総計136ページを掲載した。

(9) 「日本森林学会メールマガジン」の発行

第144号(2022年3月)～第155号(2023年2月)を発行した。学会大会や表彰など各種の学会活動に関する情報や, 研究集会や公募等の関連情報, 公式ツイッターアカウントでの情報発信などを会員等に発信した。Googleフォームを活用して原稿の提出や提出済みの原稿の編集などの取り組みを行った。

(10) ウェブサイトの更新

ウェブサイトを通じて, 学会大会, 定期刊行物, 表彰事業, 林業遺産やダイバーシティ推進など学会の取り組みを広報し, 公募や研究集会などの最新情報の広報を行なった。ウェブサイトの定例的な更新のほか, 会員向けの情報を提供するシステムの運用開始, 大会に関する問い合わせ

を一元化したシステムの構築, Google フォームを活用した新たな会費区分の会員からの希望収集, 公式ツイッターの開設による情報発信の開始などの取り組みを行なったほか, ウェブサイトのデザインを必要に応じて微修正した。

(11) 公開シンポジウムの開催

新型コロナウイルスの感染拡大への対応として開催中止とした。

(12) 日本森林学会各賞の選考及び日本農学賞等への学会推薦

日本森林学会賞は, 浅野友子会員 (東京大学) の「大雨時の山地流域におけるピーク生起時刻の遅れは斜面ではなく主に河道で生じる」, 石塚成宏会員 (森林総合研究所) の「気候変動緩和のための温室効果ガスおよび土壌炭素の動態解明」に, 日本森林学会奨励賞は, 今村直広会員 (森林総合研究所) の「Estimation of the rate of ^{137}Cs root uptake into stemwood of Japanese cedar using an isotopic approach」, 経隆 悠会員 (森林総合研究所) の「Comparison of the return period for landslide-triggering rainfall events in Japan based on standardization of the rainfall period」, 芳賀和樹会員 (東京大学) の「御山守の仕事と森林コントロール」に, 日本森林学会学生奨励賞は小林慧人会員 (投稿時: 京都大学 応募時: 森林総合研究所) の「Massive investments in flowers were in vain: Mass flowering after a century did not bear fruit in the bamboo *Phyllostachys nigra* var. *henonis*」, 堀田亘会員 (投稿時: 北海道大学 応募時: 北海道大学) の「Recovery and allocation of carbon stocks in boreal forests 64 years after catastrophic windthrow and salvage logging in northern Japan」, 峰尾恵人会員 (投稿時: 京都大学, 応募時: 京都大学) の「国有林における大材生産政策の通史的解明—伝統木造建造物用材の入手難を念頭に—」に授与することを決定した。

また, Journal of Forest Research 論文賞は, JFR 論文賞選考委員会が選考し, 理事会で審議した結果, 同誌 26 巻 4 号に掲載の Motoshi Hiratsuka, Chaloun Bounithiphonh, Phonevilay Sichanthongthip, Miki Toda, Natsuko Kobayashi, Hozumi Hashiguchi and Chanh Samone Phongoudome 「Impacts of REDD+ activities on reduction in greenhouse gas emissions in northern Lao People's Democratic Republic」に, 日本森林学会誌論文賞は, 日林誌論文賞選考委員会が選考し, 理事会で審議した結果, 103 巻 5 号に掲載の美濃羽 靖・和田 誠・田中 紡「深層学習を用いた樹幹からの打撃音に基づく樹高および材積の推定」, 104 巻 2 号に掲載の TAN JIAZE・道中 哲也・立花 敏「中国の森林動態に対する社会経済要因の短期的および長期的影響」に決定した。

第 133 回日本森林学会大会学生ポスター賞は, 理事会の承認を受けたポスター賞選考委員会を選考し, 委員長と副委員長で合議した結果, 18 名の学生会員に授与することを決定した。日本学術振興会賞, 日本学術振興会育志賞, 日本農学進歩賞, 日本農学賞について, 会員からの推薦は無かった。

(13) ダイバーシティ推進の取り組み

男女共同参画学協会連絡会の加盟学会として, 2022 年 3 月, 8 月, 12 月の運営委員会に参加し, 積極的な情報収集を行った。また, 10 月 8 日に開催された第 20 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムでは, 森林学会のダイバーシティ推進の取り組みについてポスター発表を行った。会

員向けの普及啓発活動として、学会ウェブサイトおよびメールマガジンを通じて男女共同参画やダイバーシティ推進に関するシンポジウムや受賞の案内を行った。第 133 回日本森林学会大会では、大会運営委員会と連携して託児等の費用補助を実施した。また、ダイバーシティ推進委員会主催の学会企画として、2022 年 3 月 29 日にシンポジウム「森林学会におけるダイバーシティ～多様な立場に寄りそえる学会を目指して～」を男女共同参画学協会連絡会の後援を得て開催し、3 月 27 日および 28 日にはサポート企画「～ゆるっと話そうワークライフバランスとか～」および「～ゆるっと話そうキャリア形成とか～」を開催した。第 134 回日本森林学会大会での託児等の費用補助およびダイバーシティ推進に関するシンポジウムと会員間の交流・情報交換に関する企画の準備を行った。

(14) 林業遺産の選定

新たに林業遺産 No.46「林業機械センター保存の森林鉄道車両群と根利森林鉄道遺構」、No.47「長走風穴種子貯蔵庫遺構」、No.48「旧青森営林局庁舎（現・青森市森林博物館）」の 3 件を新規に認定し、定時総会で発表した。会員を通じて 2022 年度林業遺産候補の推薦を募り、林業遺産選定委員会において審議を進めた。林業遺産選定事業には林野庁の後援協力を得て、林業遺産選定事業の普及に努めた。

(15) JABEE（日本技術者教育認定機構）への協力

JAFEE（森林・自然環境技術教育研究センター）の基幹的な組織として、JABEE や JAFEE の活動・運営に協力し、関連学協会との連携を図り、森林分野の技術者教育の向上を進め、第 133 回日本森林学会大会の学会企画において CPD（技術者継続教育）事業の推進に協力した。

(16) 関連学協会への協力と社会連携の推進

日本学術会議及び日本農学会の運営に協力した。第 12 回木材利用シンポジウム、土木における木材の利用拡大に関する横断的研究会（公社土木学会）を共催した。日本流体力学会 年会 2022（一社日本流体力学会）、講習会 流体力学基礎講座-基礎学理から数値流体力学・流体計測基礎と実例まで-（一社日本機械学会流体工学部門）、講習会 混相流入門-実例に学ぶ複雑流動現象の基礎と計測/数値計算技術（一社日本機械学会流体工学部門）をそれぞれ協賛した。FORESTRISE2022（第 3 回次世代森林産業展）（産経新聞社）、第 21 回木材工学研究発表会（公社土木学会）、地域が育てる・地域を育てる—地方留学と農山漁村の未来—（「森林・林業・山村問題を考える」シンポジウム実行委員会・一社林業経済研究所）、令和 4 年度 森林総合研究所公開講演会「ネットゼロミッション達成のための森林の役割」（森林総合研究所）、IUFRO OKINAWA 2022 Progress in Small-scale Forestry beyond the Pandemic and Global Climate Change（IUFRO 3.08.00 Small-scale Forestry）、IPBES 総会第 9 回会合から見てきた研究面でのインパクトと課題（森林研究・整備機構 森林総合研究所）、日本学術会議シンポジウム「気候変動時代における市町村による新たな森林管理とゾーニング」（日本学術会議農学委員会林学分科会）、もくネットちば木材利用シンポジウム in 千葉（千葉県木材利用ネットワーク）をそれぞれ後援した。

(17) 連携学会（旧支部）との連携

各連携学会（北方森林学会，関東森林学会，中部森林学会，応用森林学会，九州森林学会）の大会を共催し，会長・副会長が対面やオンラインで出席し挨拶，または挨拶文を送付した。2022年12月に第483回理事会と併せて連携学会長会議を開催し，各連携学会の活動状況と課題を共有した。

(18) 日本木材学会との連携

「日本森林学会と日本木材学会との交流に関する覚書」に基づき，相互に理事を派遣し，また学術大会へ役員を招待した。

(19) 国際学術交流の推進

東アジア（韓国，中国）をはじめとする諸外国との国際的学術交流を進めた。第133回大会運営委員会と協力し，大会のオンラインポスターセッションで，韓国および中国林学会からの広報ポスターおよび会員の研究発表ポスターを掲載した。また大会時には元会員の帰国留学生や諸外国の森林学会とのネットワーク形成を目的としたオンラインミーティングを開催した。

(20) 国内研究機関連携の推進

全国林業試験研究機関協議会主催のセミナー「針葉樹人工林の管理」への協力を行った。なお，講師は同協議会が手配した。同協議会との連携強化を深めるため，日本森林学会第134回大会では，学会企画として「地方公設林業試験場とは何か？～求む地域や大学との関わり～」と題するシンポジウムの開催準備を行った。また，地方公設林業試験場の役割と森林科学の推進における価値を共有するため，森林科学への特集号作成に向けた議論を行った。

(21) 中等教育との連携

第133回日本森林学会大会（オンライン開催）にて「高校生ポスター発表」（第9回）が行われた。発表数は27件，参加校数は20校と1グループで，その中から最優秀賞2件，優秀賞3件及び特別賞2件を表彰した。発表ポスターを掲載した「高校生ポスター発表ポスター集」を印刷し，記念品とともに発表校へ郵送した。ポスター発表の概要と講評を森林科学96号に掲載した。第134回大会における第10回高校生ポスター発表の準備を行った。

(22) 学会運営の改善

ウェブ会議を用いた理事会開催，電子メールを活用した役員間や各委員間の連絡や代議員や会員へのお知らせにより，会議費と通信費を節減した。経費節減と利便性の向上のため日林誌をオンラインジャーナル化した。

(23) 代議員及び理事・監事候補の選出

2022年定時総会において理事及び監事を選任した。

(24) 一般社団法人としての対応

改選に伴い、理事及び監事を修正登記した。

(25) 名簿の発行

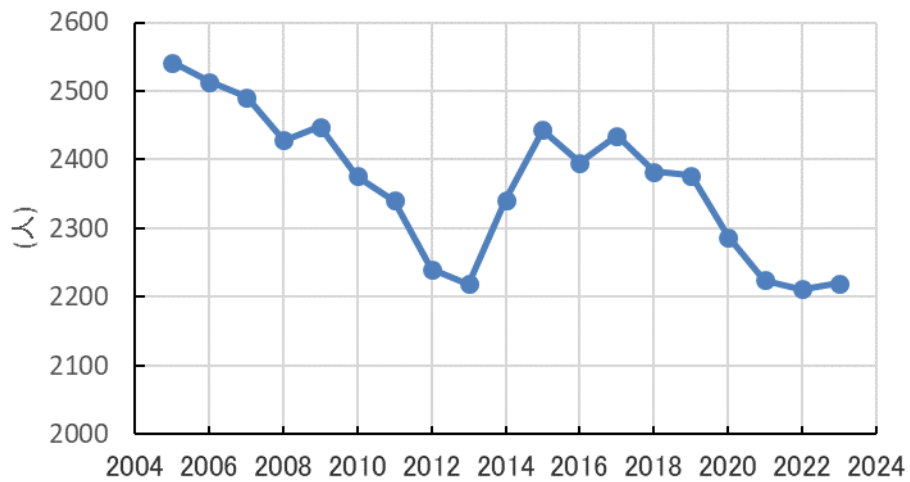
2022年度版会員名簿を発行した。

(26) 会員数の動向

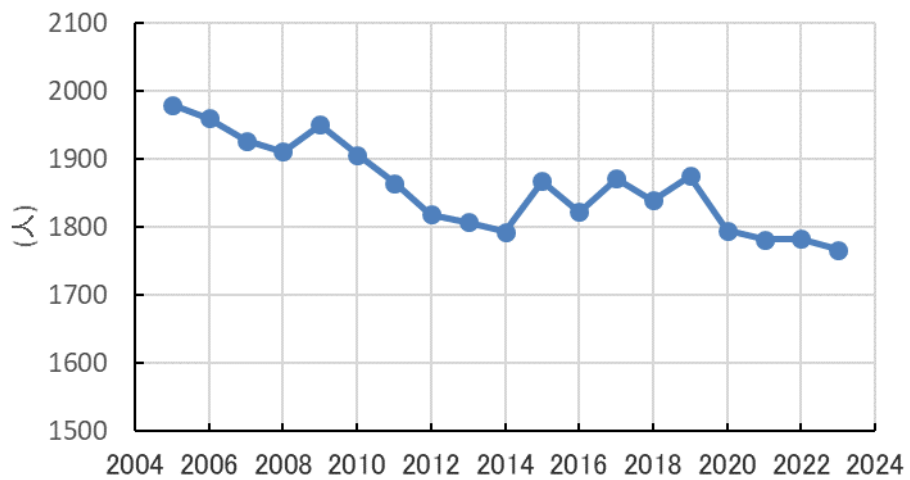
	2020/2/29	2021/2/28	2022/2/28		2023/2/28
正会員	2,287	2,224	2,211	正会員	2,220
国内一般会員	1,795	1,782	1,783	国内一般会員	1,767
a)日林誌のみ	1,252	1,246	1,230	a)森林科学	1,450
b)+JFR	95	96	94	b)+JFR	317
c)+森林科学	201	201	207		
d)+両誌	247	239	252		
国内学生会員	486	438	423	国内学生会員	449
a)日林誌のみ	429	384	371	a)森林科学	408
b)+JFR	17	12	10	b)+JFR	41
c)+森林科学	19	20	23		
d)+両誌	21	22	19		
海外在住一般会員	4	4	2	海外在住一般会員	4
a)日林誌のみ	3	3	1	a)森林科学	1
b)+JFR	0	0	0	b)+JFR	3
c)+森林科学	0	0	0		
d)+両誌	1	1	1		
海外在住学生会員	2	0	3	海外在住学生会員	0
a)日林誌のみ	2	0	0	a)森林科学	0
b)+JFR	0	0	3	b)+JFR	0
c)+森林科学	0	0	0		
d)+両誌	0	0	0		
機関会員	106	106	106	機関会員	103
賛助会員	40	38	37	賛助会員	37
合計	2,433	2,368	2,354	合計	2,360
準会員	211	201	216	準会員	208

2005年からの推移（各年2月末日時点の会員数）

正会員



国内一般会員



国内学生会員

